

すなわち直観的なものと推論的なもの、があるという示唆を与えている論文。ロ・テストの運動反応は直観的共感性をあらわすものとされ、他方、推論的共感性はロ・テストでは形体反応に対応すると想定している。

Stark, S. 1968 (c) Toward a psychology of knowledge: IV. Further illustrations of the hypothesis regarding philosophical conservatism and Rorschach movement responses. *Perceptual and Motor Skills*, 26, 455 - 460.

Stark (1965 b)の後をうけて、ロ・テストの運動反応、形態反応と政治的態度との関係を論じた研究。形態反応が個人主義、進歩主義と相関関係をもつのに対し、運動反応は全体主義・保守主義と相関があるという。

Steele, N. M. and Kahn, M. W. 1969 Kinesthesia and the Rorschach M response. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, 33, 5-10.

M反応成立に筋肉運動感覚が関与しているとの Rorschach 仮説を検証するため、ロ・テスト施行中の筋電図を記録し、運動反応出現時の筋電位を非運動反応時のそれと比較した。Sは大学生30名。その結果、M、FM出現中の筋電位上昇は有意水準に達せず、仮説は支持されなかったが、①Mの多い人のM産出時や、②攻撃的なM産出時に筋電位が上昇した。

Stein, H. 1951 Scoring movement responses on the Rorschach. *Journal of Projective Techniques*, 15, 526-533.

現行の運動反応記号化の問題点(例えば、Mを人間に限るのは決定因の次元に内容を持ち込んでいるし、人間や動物の運動には Fm, mF, m の如き形態優位性を考慮していない等)を指摘し、新しい記号化の方法として、形態優位性から FM, MF, M の分類、運動の種類から M₁(伸張的)、M₂(屈曲的)及び M₃(阻止型のMに相当)に分類する体系を提案している。

Stein, H. 1956 Developmental changes in content of movement responses. *Journal of Projective Techniques*, 20, 219-223.

児童期の自己主張的Mが成人の服従的Mに発展していくとのMの内容に関する Piotrowski 仮説の検証研究。8, 12, 16歳の児童20名ずつのロ・テストのM, FM, mを「自己主張的」、「服従的」及び「不明」に三分し比較

したところ、8歳と16歳の出現パターンは似ており、これにくらべ12歳では自己主張M, FM, が多出し、不明Mと服従FMが減少しており、仮説は支持されなかった。

多田治夫 1968 (a) 運動反応の成立機制に関する研究の概観——運動反応と実際の運動との関係——宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」pp. 3-10.

Rorschach以来、インクプロットのなかに運動を見ることと、現実生活で身体運動が活発なこととの間には逆相関があると仮定されている。これまでの報告15篇を調べると、仮説を支持するのは8篇で、賛否は決め難い。その原因として、運動反応と実際の身体運動の指標の選び方、研究デザインの組み方の違いが指摘され、今後の課題が示された。

多田治夫 1968 (b) 共感性の問題。宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」pp. 26-34.

M反応が共感性を示すという解釈仮説の実証研究は従来からあまり多くない。その理由は、共感性概念が多義的なことに加えて、運動反応がプロットの物理的刺激要素を利用する他の決定因とは異なり、主観的刺激要素をもち込んでいる反応である以上、投映された人間像が共感性を表わすことは自明の理と解されるためではないかという。

多田治夫 1968 (c) ロールシャッハ運動反応と自己像の関係。宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」pp. 123-130.

男子大学生54名に実施した自己像尺度(40対の反意語よりなる評定尺度)と運動反応との関係をみたもの。運動反応の数と自己評定との間には有意な関係がほとんど認められなかったが、運動の型と自己評定との間には対応関係がみられ、伸張型のMは情動安定性・意欲性を、屈曲型のMは感性を反映していた。

田中富士夫 1958 ロールシャッハの運動反応と知能との関係。教育心理学研究, 6, 21-27.

ロ・テストの運動反応と知能(W-B検査)との相関関係を、非行少年100名の資料から検討した。MとIQの間には有意な正相関を認めたが、それは「低い知能では多くのMが出現しないが、高い知能では必ずしもMが多いとはいえない」関係であると指摘している。また、Mの型(姿勢と動作など)によってIQとの相関に高低の差がみられた。